

研究論文

備前焼大甕の容量変遷とその要因

— 内容量記載資料の分析を中心に —

立花唯翔

要 旨

中世の大甕のうち現在の岡山県備前市伊部周辺で生産されていた備前焼大甕は、器高が 60 cm 以上の大甕と定義される巨大な製品であり、内容量を示す線刻が存在するという資料的特徴を有する。この容量に関わる資料的特徴は、国内の他の陶磁器製品に類を見ないような特異なものであると同時に、大甕の消費の様相や中世当時の枠制の変遷をはじめとした制度史・社会史に関わる様々な情報を内包するものである。しかし、備前焼大甕はその容量の持つ情報の重要性が古くから指摘されるものの、容量に関する研究はほとんど行われておらず、不明な点が多い。そこで本稿では備前焼大甕の容量計測から中世における備前焼大甕の器形と容量の変遷を明らかにすること、内容量が記載された大甕の容量変化を整理することを目的に、西日本に分布が確認される 163 点の備前焼大甕を集成し、容量計測を行った。

備前焼大甕の頸部容量を計測した結果、全時代の備前焼大甕は「170 ℥ 以下（1 類）」、「195 ℥ 以上（2 類）」という容量を基にした分類ができる。各時期の器形と容量の分析からは、16 世紀後半に備前焼大甕の器形の長胴化と容量の増加が顕著であることが明らかにできた。

また、備前焼大甕の内容量記載資料の分析からは、16 世紀前半から 17 世紀前半における内容量を示す線刻の年代観と容量の変化を整理した。その結果、16 世紀前半から後半にかけて内容量記載資料の容量が増加するに伴って線刻の示す一石の値が大きくなること、三石入りの大甕が衰退し、二石入りの大甕が占める割合が大きくなること、大甕の作りや線刻の表記が丁寧になるなどの変化が確認できた。

以上のことから、備前焼大甕は 16 世紀前半から後半にかけて器形・容量・線刻に大きな変化が確認でき、この時期に備前焼大甕の品質改良が生じると捉えられ、この変化の要因として備前焼大甕の容量の規格保証が要因であると推察される。内容量記載資料かの分析から、備前焼大甕の容量の基準となる枠は「壳升」と呼ばれる西日本で広域使用圈を形成する商業枠の容量に近似することが推測される。備前焼大甕の容量が西日本の中世社会における経済活動の一端を反映しているといえるだろう。

キーワード：中世、西日本、大甕、備前焼、容量

はじめに

現在の岡山県備前市伊部周辺で生産された備前焼大甕は、畿内・瀬戸内海周縁部を中心とする西日本の広い範囲で分布が確認され（伊藤 2008）、複数個の大甕を埋設した埋甕遺構や甕棺墓など様々な検出例が数多く報告されていることから、備前焼大甕は中世の西日本で幅広い用途で利用された代表的な貯蔵具であるといえるだろう。

この備前焼大甕であるが、その大甕が有する「大きさ」と「線刻」の 2 種類が資料的特徴としてあげられる。

備前焼大甕の「大きさ」については、器高 100 cm を超えるようなものも存在することから、「備前焼の器種においてばかりではなく、国内の陶磁器全体から見ても最大級の法量をもつ製品群（上西 2001 653 頁）」と評されるように、他産地の大甕と比較して容量の大

きな製品であることが知られる。

備前焼大甕の「線刻」については、一部の備前焼大甕の肩部に「二石入」「三石入」というような大甕の容量を示す線刻が施されていることがある¹⁾。この容量を示す線刻は、貯蔵量など大甕の用途に大きく関係する容量を端的に理解するという機能的な情報を示すものであると同時に、一目でその大きさを把握できるものであるといえる。他産地の大甕では、このような内容量を示す線刻が確認できるものはわずかであり、このような容量を示す線刻は備前焼大甕を代表する特徴であるといえるだろう。

のことから、備前焼大甕はその大きさと線刻による内容量表示に特徴がある製品であるといえる。この 2 つの特徴は、大甕の機能や用途を考えるうえでの大事な要素であるとともに、内容量を示す線刻・紀年銘・

型式分類などというような様々な情報を組み合わせることで、当時の大甕の生産・消費の様相やその要因となる社会制度や産業の変化などを明らかにする判断材料になる。これは臼井洋輔氏が「秀吉の検地石直しにかかるわが国の枠制の発達や地域性を側面から調べる手段になるかも知れない（臼井 1984 52 頁）」と指摘するように、備前焼大甕の容量が当時の社会の様相を明らかにする判断材料になる可能性を秘めていることを示している。

ところが、備前焼大甕の容量に関する研究は以前からその重要性が指摘されているものの、ほとんど行われていないのが現状である。これらの点を踏まえて本稿では、中世西日本における備前焼大甕を集成し、容量分析を行うことで、備前焼大甕の容量の変遷とその要因について予察する。

1. 備前焼大甕の容量に関する研究史の現状と課題

備前焼大甕に関する研究は間壁忠彦氏・乗岡実氏・重根弘和氏らによる分類（間壁 1990、乗岡 2001、重根 2003、2014、2022）や伊藤晃氏による全国を対象にした集成（伊藤 2008）などがあり、中世備前焼全体の分類・集成の中で大甕の年代観や各時期の流通の様相が明らかにされてきた。これまでの備前焼大甕に関する研究は、型式分類による年代区分の確立、集成による分布の把握など、年代・流通の問題に焦点を当てて行われてきたといえるだろう。

そのため、備前焼大甕に関する研究のうち、大甕の容量に注目された研究は数例にとどまるに過ぎない。この備前焼大甕の容量に関する研究については、「法量に着目した研究」、「実容量に着目した研究」の2つの流れに基づいて説明できる。

「法量に着目した研究」は、伊藤晃氏・上西節雄氏による紀年銘入備前焼大甕の法量計測（伊藤・上西 1977）や藤原里香氏による備前焼大甕の観察と法量の計測（藤原 2000）がある。これらの研究では、16世紀後半から17世紀前半における時代の資料が分析対象となり、実年代に沿った備前焼大甕の法量の変遷が明らかにされた。

「実容量に着目した研究」については、主に「実容量の検証」という目的のもと研究が深められてきた。主な事例としては、堺環濠都市遺跡（SKT21 地点）で出土した備前焼大甕の線刻で示された内容量と実容量の整合性の検証（堺市教育委員会 1984）のほか、臼井洋輔氏による紀年銘資料を中心とした備前焼大甕の分

析がある。臼井氏は、「二石入」「三石入」と内容量が記載された16世紀後半の備前焼大甕がほぼ同じような大きさであることを指摘し、実際に備前焼大甕3点に水を直接注水することで、それぞれの容量が近似することを明らかにした。さらに、臼井氏は室町時代の枠の容量を算出し、それを大甕の実容量と比較することで、大甕の記載内容の変化が枠制の変化によるものであると推察し、備前焼大甕の容量と枠制の関係性を指摘した（臼井 1984）。この臼井氏による先行研究は、備前焼大甕の容量と枠制の変遷の関係を検討した唯一の事例であるとともに、備前焼大甕の容量の変遷とその要因を予察し、備前焼大甕の容量が持つ情報の重要性を示した論考である。

ここまで、備前焼大甕の容量に関する先行研究を振り返ってきた。これまでの備前焼大甕の容量に関する研究は、法量と実容量に基づく2つの視点に分けられる。それぞれ、大甕に施された文字情報と容量に関する情報を組み合わせて、実年代に基づいた「大きさ」の変遷と記載容量の検証が行われている。しかし、備前焼大甕の容量に関する先行研究は、先述のとおり型式分類や分布に関する先行研究が充実しているものの容量に焦点が当てられた研究が極めて少ないと問題に加えて、「分析の紀年銘資料への偏り」、「中世枠の認識不足」の2つの課題があげられる。

「分析の紀年銘資料への偏り」は、これまで容量の検討が行われてきた備前焼大甕が、紀年銘資料を中心であるという問題である。製作年代が確定する紀年銘資料は、その年代の特徴を決定づける上で重要な資料であることは明確であり、伊藤・上西両氏や臼井氏の先行研究においても各年代の大甕の様相を把握するための実年代資料として扱われた。しかし、備前焼大甕の紀年銘資料はその多くが16世紀後半から17世紀前半の年代を示すものが大半を占めるため、時期的偏りが確認される。そのため、これまでの先行研究では16世紀後半以前の備前焼大甕の容量についてはほとんど検討されておらず、中世全体における容量の変遷については不明な点が多い。

「中世枠の認識不足」は、大甕の容量が検討される際に中世枠の容量への理解が不十分な点に問題がある。中世枠の容量については宝月圭吾氏の先行研究（宝月 1961）などで、近世に入るまで全国各地に様々な容量を有する枠が乱立したことがすでに示されている。しかし、発掘調査報告書などで掲載される容量は「一石=約180ℓ」という現在の枠に当てはめた容量で単純に認識される場合が多く、備前焼大甕の製作年代の

状況を反映したものであるとはいえない。そのような背景の中で、臼井氏は備前焼大甕の容量の変化を中世の枠制と対応させるために室町時代の枠の容量を算出して比較を行ったが、算出された枠の容量は1例のみであり、中世枠の複雑な乱立状況を示したものであるとは言い難い。文献資料から得られた中世枠に関する知見と考古資料としての備前焼大甕との比較が不十分であることが、中世に製作された備前焼大甕の容量を分析するうえで大きな障壁となっている。

以上のことから、備前焼大甕の容量については時期的偏りのある紀年銘資料の性質により16世紀後半以前の中世の大部分の資料の計測がほとんど行われていないほか、大甕に記載された内容量が現代の枠制に基づいて単純に理解されているという問題がある。この問題を解決するにあたって、紀年銘資料以外の備前焼大甕を加えた容量分析によって、中世全体の容量の変化を追うこと、中世枠の容量を算出し、それを照らし合わせることによって、大甕の容量を決定づける単位の特定を行い、その変遷を明らかにすることが、中世における備前焼大甕の容量の意図を解明するうえで重要なポイントになるだろう。

2. 研究の目的と方法

本稿では先行研究の課題を踏まえて、中世における備前焼大甕の容量の変遷を示し、中世枠との関連性について言及することを目的とする。まず、備前焼大甕を集成し、容量計測を行うことで、中世の各時期における備前焼大甕の容量の特徴と変遷を示す。また、内容量が記載された資料については、記載容量が示す一石を算出し、中世枠の容量と照らし合わせることで、備前焼大甕の容量と中世枠の関連性について予察する。

研究の方法については、以下のとおりである。

(1) 分析資料の集成と分類

まず、容量の計測にあたり資料の集成を行った。本稿で集成の対象とした資料は、近畿地方（ただし滋賀県・奈良県を除く）、中国・四国地方（ただし鳥取県・島根県を除く）、福岡県に分布が確認される備前焼大甕のうち器高が^d 60.0 cm 以上（伊藤・上西 1977）であり、実測図で底部から口縁端部まで復元できる、著しい歪みのないものを計163点集成した（表2～5）。集成を行った備前焼大甕は報告書に実測図が掲載されているものがほとんどであるが、紀年銘や内容量が施され重要であると判断したものについては、「Agisoft Metashape」を用いた三次元計測により、実測図を作成した。

また、本稿では備前焼大甕の年代観と分析資料数の兼ね合いから、重根編年（重根 2014）をもとに中世をI～IVの4期に分ける時期区分を設定した。本稿の時代区分と重根編年の対応関係は表1で示したとおりである。

(2) 容量計測の方法と主要分析項目

本稿で行う陶器製大甕の容量計測手段は「円柱集計算出法」を採用する。円柱集計算出法は実測図を用いて大甕の内面を円柱の総体として捉えるものであり、大甕の内面に細かく積み重ねた円柱の体積 ($V = \pi r^2 h$) の合計を大甕の容量とする。

円柱集計算出法は実測図が入手できれば比較的短時間で簡単に容量を計測できるという長所があり、縄文土器や土師器の容量計測などに広く活用されている。しかし、この方法は大甕の内面を円柱の総体に置き換えたものを容量として認識するため、「土器の曲線部分を円柱として直線処理するため誤差が生じることは避けられない（高瀬 2021 206 頁）」と指摘されるように、大甕内面の形状を完全に正確には捉えることができないという課題がある。円柱集計算出法による容量計測は個々の円柱の高さ (h) を1 cm に統一して算出する場合が多いが、本稿では個々の円柱の高さを0.5～0.7 cm と細かく設定することで、計測精度を向上させた。

表1 本稿の時期区分と重根編年

世紀	本稿の時期区分		重根編年の時期区分 (重根 2014)
13世紀	I期		II A
			II B
			III A
			III B
14世紀	II期		IV A
			IV B
15世紀	III期	III a	V A
		III b	V B
16世紀	IV期		VIA
17世紀			

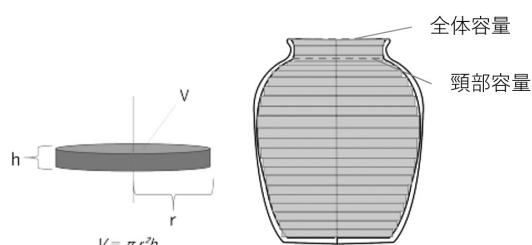


図1 円柱集計算出法のイメージ図と計測位置

表2 備前焼大甕集成表1

番号	地域	遺跡名	器高(cm)	胴部最大径(cm)	相対的深さ	全体容量(L)	頸部容量(L)	記載容量	本稿の時期区分	重根編年	紀年銘	報告書番号	管理番号
1	山城国	宇治市街遺跡	86.4	78.0	110.76923	276.2	263.2		I期	ⅢB		1	8図-T39
2		平安京左京六条三坊五町	85.6	76.4	112.04188	265.3	257.0		I期	ⅢB		2	図版41-8
3		平安京左京八条三坊九町	95.6	78.8	121.31980	311.4	298.0		I期	ⅢA		3	図26-234
4		平安京左京八条一坊十六町	80.8	69.0	117.10145	227.9	218.3		I期	ⅢB		4	図26-113
5	摂津国	大阪城跡	89.4	79.5	112.45283	268.2	255.3		I期	ⅡB		5	図42-159
6	摂津国	兵庫津遺跡	68.8	73.6	93.47826	166.8	160.2		I期	ⅡA		6	図版126-1188
7	摂津国		90.0	80.5	111.80124	292.0	281.0		I期	ⅢB		7	91図-210
8	紀伊国	長寿寺境内	68.0	62.5	108.8	131.0	125.1		I期	ⅢB	1342(康永元)年	8	図1-1
9	播磨国	大野遺跡	85.5	80.0	106.875	283.3	268.8		I期	ⅢA		9	図版8-240
10		南上山遺跡	85.7	73.4	116.75749	281.7	274.1		I期	ⅢB		10	11図SK101-A
11			86.1	70.3	122.47511	212.7	206.5		I期	ⅢB		10	11図SK101-B
12			91.2	78.6	116.03053	317.2	307.0		I期	ⅢB		10	12図SK102
13	美作国	久田・堀ノ内遺跡	61.6	57.6	106.94444	106.4	101.1		I期	ⅢA		11	508図-1227
14			82.8	73.6	112.5	231.5	224.0		I期	ⅢB		11	545図-1270
15	備前国	百間川原尾島遺跡	75.0	73.8	101.62602	217.1	208.3		I期	ⅡA		12	229図-2061
16	備後国	草戸千軒町遺跡	83.0	80.0	103.75	246.8	242.2		I期	ⅡA		13	3図-5
17			87.0	78.0	111.53846	259.7	249.0		I期	ⅡA		14	7図-78
18			82.8	78.0	106.15385	232.8	219.7		I期	ⅡB		15	11図-86
19			82.0	83.0	98.79518	345.2	322.8		I期	ⅢB		16	6図-57
20			85.0	82.0	103.65854	274.9	265.2		I期	ⅢA		17	14図-110
21			79.8	75.0	106.4	221.9	212.8		I期	ⅢA		18	15図-142
22	安芸国	善福寺南遺跡	75.0	58.5	128.20513	118.6	113.7		I期	ⅢB		19	5-3図
23	讃岐国	東山崎・水田遺跡	61.8	50.4	122.61905	92.0	88.1		I期	ⅢB		20	104図-139
24	阿波国	中庄東遺跡	72.3	59.4	121.71717	131.5	127.9		I期	ⅢB		21	575図-999
25	土佐国	坂本遺跡	79.2	72.0	110	278.3	258.4		I期	ⅢA		22	124図-2172
26	伊予国	湯築城	72.4	66.0	109.69697	162.7	156.2		I期	ⅢB		23	図79-307
27	筑紫国	博多遺跡群	72.4	65.0	111.38462	154.9	150.5		I期	ⅢB		24	Fig39-148
28	山城国	山科本願寺跡	86.4	75.6	114.28571	287.8	279.7		II期	IVB		25	36図-101
29			83.7	75.6	110.71429	210.2	204.8		II期	IVB		25	41図-108
30			90.0	74.4	120.96774	277.1	269.0		II期	IVB		25	42図-109
31			90.0	79.2	113.63636	300.4	291.8		II期	IVB		25	45図-114
32			83.2	79.2	105.05051	266.0	255.4		II期	IVB		25	47図-117
33		嵯峨野遺跡群	81.6	76.0	107.36842	259.3	249.1		II期	IVB		26	図55-210
34	摂津国	長辻遺跡	61.3	49.6	123.58871	71.2	67.7		II期	IVB		27	図版24-49
35		兵庫津遺跡	97.0	82.5	117.57576	364.0	344.7		II期	IVA		7	66図-115
36			90.4	81.6	110.78431	328.8	319.9		II期	IVB		6	図版122-1064
37	和泉国	堺環濠都市遺跡	86.0	76.0	113.15789	263.5	254.8		II期	IVB		28	77図-1
38	和泉国		80.4	74.4	108.06452	206.6	200.9		II期	IVB		29	33図
39	和泉国		63.6	51.6	123.25581	87.3	84.1		II期	IVB		30	38図-36
40	紀伊国	川関遺跡	87.8	76.8	114.32292	275.2	266.6		II期	IVB		31	141図-1488
41	河内国	天野山金剛寺	84.8	75.0	113.06667	292.0	281.4		II期	IVA		32	50図-428
42			87.9	82.8	106.15942	302.2	287.9		II期	IVA		32	52図-429
43	播磨国	円満寺東の谷遺跡	72.0	66.6	108.10811	152.3	146.6		II期	IVB		33	図234-2
44		室津4丁目遺跡	75.8	80.0	94.75	267.7	254.8		II期	IVA		34	12図-3
45	美作国	久田・堀ノ内遺跡	84.6	78.3	108.04598	267.1	259.0		II期	IVB		11	544図-1269

表3 備前焼大甕集成表2

番号	地域	遺跡名	器高(cm)	胴部最大径(cm)	相対的深さ	全体容量(L)	頸部容量(L)	記載容量	本稿の時期区分	重根編年	紀年銘	報告書番号	管理番号
46	備前国	すぐ毛山遺跡	66.6	57.2	116.43357	118.7	112.9		II期	IVB		35	25図
47		百間川当麻遺跡	86.4	79.3	108.95334	270.4	256.1		II期	IVB		36	109図-58
48	備中国	大村遺跡	66.4	56.0	118.57143	106.2	102.5		II期	IVB		37	36図-76
49			66.4	58.4	113.69863	110.4	107.1		II期	IVB		37	60図-176
50			64.0	60.0	106.66667	116.7	112.7		II期	IVB		37	61図-177
51		菰池遺跡	70.5	58.2	121.13402	110.2	104.2		II期	IVB		38	64図-224
52	備後国	尾道遺跡	94.4	79.2	119.19192	313.4	305.9		II期	IVB		39	9図-11
53	安芸国	廿日市町屋跡	70.8	63.6	111.32075	143.0	138.3		II期	IVB		40	66図-314
54		石佛遺跡	62.9	58.2	108.07560	107.7	101.1		II期	IVB		19	1-101図-306
55		善福寺遺跡	73.2	64.2	114.01869	160.9	153.7		II期	IVB		41	4-8図-24
56	周防国	大向門前遺跡	60.0	48.6	123.45679	75.0	72.9		II期	IVB		42	図40-4
57		庵河内遺跡	74.8	65.6	114.02439	158.1	153.3		II期	IVA		43	22図-71
58	長門国	長門国府	84.0	82.4	101.94175	308.0	296.9		II期	IVA		44	8図-7
59	讃岐国	香西南西打遺跡	71.0	62.4	113.78205	138.5	132.3		II期	IVB		45	10図-38
60	讃岐国	東山崎・水田遺跡	91.8	87.6	104.79452	305.3	298.9		II期	IVB		20	198図-596
61	阿波国	中庄東遺跡	69.0	60.0	115	135.5	129.3		II期	IVB		46	図572-996
62	土佐国	田村遺跡	66.6	61.2	108.82353	127.8	121.9		II期	IVB		47	図163-34
63	土佐国	弘人遺跡	69.6	58.4	119.17808	118.7	115.6		II期	IVB		48	34図-252
64	伊予国	湯築城	67.3	59.1	113.87479	127.9	123.1		II期	IVB		23	図80-309
65		道後今市遺跡	73.2	59.2	123.64865	136.8	130.9		II期	IVB		49	図135-NO.198
66		ウラショウジ遺跡	76.4	56.8	134.50704	89.9	84.0		II期	IVB		50	37-067(2号墓)
67		西禅寺	92.0	80.8	113.86139	261.9	251.8		II期	IVA		50	37-064
68		閨住	72.8	65.6	110.97561	129.6	122.2		II期	IVB		50	37-062
69	海中	水の子岩海底遺跡	76.2	73.8	103.25203	207.5	198.4		II期	IVB		51	41図31-01
70			81.6	75.0	108.8	236.1	224.9		II期	IVB		51	41図31-02
71			60.0	59.2	101.35135	115.6	109.1		II期	IVB		51	46図32-01
72			70.0	62.1	112.72142	134.5	126.7		II期	IVB		51	46図32-02
73			70.9	65.0	109.07692	156.8	146.0		II期	IVB		51	46図32-03
74			68.8	62.0	110.96774	136.5	129.7		II期	IVB		51	46図32-04
75			73.1	64.9	112.63482	152.3	145.4		II期	IVB		51	47図32-05
76	筑紫国	博多遺跡群	80.0	70.0	114.28571	225.0	215.6		II期	IVB		52	Fig19-27
77	山城国	山科本願寺	84.5	82.5	102.42424	298.5	281.6		IIIa期	VA		53	図142-32
78			104.0	84.0	123.80952	373.3	358.7		IIIa期	VA		25	38図-103
79			98.0	84.6	115.83924	313.4	300.6	三入	IIIa期	VA		25	40図-106
80			91.8	81.3	112.91513	331.4	310.5	三入	IIIa期	VA		25	43図-111
81		平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)	94.4	78.8	119.79695	312.4	290.7		IIIb期	VB		54	55図-1007
82	摂津国	平安京左京四条四坊三町	106.0	86.5	122.54335	408.3	375.2		IIIb期	VB		55	図70-444
83		平安京左京四条四坊一町	99.7	85.2	117.01878	349.6	329.2	參石入	IIIb期	VB		56	図版29-105
84		沢の鶴大石蔵	104.0	79.5	130.81761	313.6	293.3		IIIb期	VB		57	40図-34
85		御影波返し蔵	102.6	81.0	126.66667	361.5	335.7		IIIb期	VB		58	p.13
86	久宝寺寺内町遺跡	久宝寺寺内町遺跡	99.2	85.6	115.88785	362.8	331.4	參石入	IIIb期	VB		59	32図-96
87			98.0	78.0	125.64103	299.2	275.6		IIIb期	VB		59	34図-102
88			100.0	77.2	129.53368	292.0	263.4		IIIb期	VB		59	34図-103
89		津田城跡	74.2	56.0	132.5	110.4	100.1		IIIb期	VB		60	28図-16
90		平野環濠都市遺跡	72.0	64.0	112.5	140.2	131.4	二入	IIIa期	VA		61	図2
91		大阪城跡	94.0	79.5	118.23899	311.1	296.0	貳石入	IIIb期	VB		62	図9-11
92		兵庫津遺跡	90.8	81.6	111.27451	320.3	303.0		IIIa期	VA		63	647図-583

表4 備前焼大甕集成表3

番号	地域	遺跡名	器高 (cm)	胴部 最大径 (cm)	相対的 深さ	全体容量 (L)	頸部容量 (L)	記載 容量	本稿の 時期区分	重根 編年	紀年銘	報告書 番号	管理番号
93	和泉国	堺環濠都市遺跡	100.0	90.4	110.61947	435.9	415.6		Ⅲa期	VA		64	57図-3
94			97.6	84.8	115.09434	362.1	343.0		Ⅲb期	VB		65	319図
95			104.8	88.6	118.28442	400.7	373.1		Ⅲb期	VB		65	320図-1
96			81.6	77.6	105.15464	249.9	235.8	三入	Ⅲa期	VA		65	321図-4
97			89.6	77.6	115.46392	278.8	266.1	二石入	Ⅲa期	VA		66	109図-6
98			66.2	58.2	113.74570	104.3	99.3		Ⅲa期	VA		67	114図
99			90.0	82.5	109.09091	328.3	309.9	三入	Ⅲa期	VA		68	裏表紙
100			105.6	82.8	127.53623	421.1	399.8		Ⅲb期	VB		69	12図-1
101			92.0	84.8	108.49057	322.6	306.3		Ⅲb期	VB		70	8図-8
102			91.2	76.4	119.37173	258.1	247.3		Ⅲb期	VB		70	8図-9
103			104.0	91.2	114.03509	413.7	392.8	三石入	Ⅲb期	VB		70	9図-10
104			107.6	85.1	126.43948	373.1	352.8	三石入	Ⅲb期	VB		70	25図-244
105			90.8	83.4	108.87290	330.0	308.3		Ⅲa期	VA		70	25図-245
106			98.4	84.6	116.31206	314.2	285.6		Ⅲb期	VB		30	32図-2
107			90.0	81.0	111.11111	314.7	295.0		Ⅲa期	VA		71	86図-243
108			89.3	81.0	110.24691	265.8	253.9		Ⅲa期	VA		72	24図
109			92.0	76.0	121.05263	249.4	235.5		Ⅲb期	VB		72	26図
110			102.0	86.0	118.60465	399.0	356.2		Ⅲb期	VB		72	27図
111			94.5	80.0	118.125	321.5	304.7	二石入	Ⅲb期	VB		72	49図
112			91.0	86.0	105.81395	356.6	332.6	三入	Ⅲa期	VA		72	51図
113	紀伊国	根来寺坊院跡	106.9	85.2	125.46948	441.7	418.3	三石入	Ⅲb期	VB		73	16図-20
114			88.2	81.6	108.08824	298.3	262.1	三入	Ⅲa期	VA		74	図5-77
115			99.6	82.8	120.28986	391.0	367.5	二石入	Ⅲb期	VB		74	図13-213
116			92.0	84.0	109.52381	340.2	325.0	二石入	Ⅲb期	VB		75	図69-555
117			92.0	81.6	112.74510	293.6	281.0		Ⅲb期	VB		75	図78-684
118			84.0	79.2	106.06061	269.7	249.7	三入	Ⅲa期	VA		76	34図-162
119			84.0	78.6	106.87023	242.5	224.0	三石入	Ⅲa期	VA		76	65図-327
120			91.2	80.4	113.43284	294.9	286.9	三入	Ⅲa期	VA		76	65図-328
121			85.0	76.0	111.84211	261.9	248.7	二石入	Ⅲa期	VA		77	図6 P-3
122			88.0	83.0	106.02410	319.6	302.2	二	Ⅲa期	VA		77	図6 P-4
123			95.0	80.5	118.01242	304.1	286.7	三入	Ⅲa期	VA		77	図7 P-6
124			89.0	79.5	111.94969	271.8	258.4	二石	Ⅲa期	VA		77	図7 P-7
125			92.0	75.0	122.66667	251.9	240.8		Ⅲb期	VB		77	図7 P-8
126			92.0	85.00	108.23529	310.4	290.5		Ⅲb期	VB		77	30図-122
127			93.4	81.2	115.02463	300.2	282.9		Ⅲa期	VA		78	14図-92
128	播磨国	加茂遺跡	94.4	80.8	116.83168	295.9	285.6		Ⅲb期	VB		79	36図-305
129		本町遺跡	104.4	91.2	114.47368	465.2	440.4		Ⅲb期	VB		80	80図-C218
130		姫路城下町遺跡	100.0	84	119.04762	361.3	336.6		Ⅲb期	VB		81	図7-21
131		江井ヶ島長楽寺	96.5	73.0	132.19178	271.1	258.9	二石入	Ⅲb期	VB	資料 調査	—	
132		福田片岡遺跡	88.5	90.4	97.89823	355.8	332.8	三入	Ⅲa期	VA		82	挿図253-2
133	淡路国	叶堂城跡	98.4	80.0	123.00000	296.8	280.7		Ⅲb期	VB		83	33図-89
134	備前国	片口田地窯跡	92.8	80.8	114.85149	296.3	278.8		Ⅲa期	VA		84	114図
135		周匝茶臼山城	81.0	80.4	100.74627	253.9	231.2	三入	Ⅲa期	VA		85	34図-91
136		安芸国	万徳院跡	99.5	81.0	122.83951	341.8	324.7	二□入	Ⅲb期	VB		86
137	讃岐国	東山崎・水田遺跡	81.0	73.2	110.65574	205.6	196.8		Ⅲa期	VA		20	76図-95
138	阿波国	黒谷川宮ノ前遺跡	72.0	58.4	123.28767	119.1	114.9		Ⅲa期	VA		87	284図-854
139	伊予国	湯築城	84.4	77.8	108.48329	257.2	238.8		Ⅲa期	VA		23	図93-400
140			89.8	79.5	112.95597	288.4	274.6		Ⅲa期	VA		23	図94-402
141	ウラショウジ遺跡	84.8	75.2	112.76596	163.5	154.1		Ⅲa期	VA		50	37-067 (1号墓)	

表5 備前焼大甕集成表4

番号	地域	遺跡名	器高(cm)	胴部最大径(cm)	相対的深さ	全体容量(L)	頸部容量(L)	記載容量	本稿の時期区分	重根編年	紀年銘	報告書番号	管理番号
142	その他 岡山県内 紀年銘資料		104.7	82.5	126.90909	360.0	337.5	參石入	Ⅲb期	VB	1571(元亀2)年	84	9図-9
143			95.6	77.0	124.15584	257.3	236.2	貳石入	Ⅲb期	VB	1582(天正10)年	84	10図-10
144			95.5	78.4	121.81122	311.3	293.3	貳石五斗入	Ⅲb期	VB	1582(天正10)年	84	11図-11
145			98.0	75.7	129.45839	282.8	262.6	二石入	Ⅲb期	VB	1582(天正10)年	84	12図-12
146			92.4	78.0	118.46154	290.7	269.9	貳石入	Ⅲb期	VB	1583(天正11)年	84	13図-13
147			93.5	76.2	122.70341	263.9	244.2	貳石五斗入	Ⅲb期	VB	1583(天正11)年	84	14図-14
148			104.8	80.4	130.34826	372.3	349.5		Ⅲb期	VB	1594(文禄3)年	84	15図-15
149			104.8	82.4	127.18447	452.7	435.8		Ⅲb期	VB	1594(文禄3)年	84	16図-16
150	豊前国	香月公民館所蔵資料	104.4	82.8	126.08696	346.3	331.0		Ⅲb期	VB		88	28図-281
151	筑紫国	博多遺跡群	98.0	75.0	130.66667	270.8	254.2		Ⅲa期	VA		52	Fig19-29
152	摺津国 久宝寺寺内町遺跡		101.2	80.8	125.24752	399.9	375.5		Ⅳ期	VI A		59	32図-97
153			100.8	78.8	127.91878	316.0	292.5		Ⅳ期	VI A		59	33図-99
154			97.8	77.4	126.35659	260.0	246.8		Ⅳ期	VI A		30	32図-1
155	和泉国 堺環濠都市遺跡		75.6	51.6	146.51163	110.5	106.3		Ⅳ期	VI A		30	31図-35
156			76.8	65.1	117.97235	131.5	109.7		Ⅳ期	VI A		89	66図-35
157	播磨国	姫路城下町遺跡	75.6	58.4	129.45205	131.6	116.6		Ⅳ期	VI A		81	11図-43
158	その他 岡山県内 紀年銘資料		105.5	80.5	131.05590	363.5	338.1		Ⅳ期	VIA	1598(慶長3)年	84	17図-17
159			105.6	79.0	133.67089	275.0	256.8		Ⅳ期	VIA	1607(慶長12)年	84	18図-18
160			100.8	78.6	128.24427	324.6	300.4	貳石入	Ⅳ期	VIA	1610(慶長15)年	84	19図-19
161			106.8	81.2	131.52709	350.0	313.4	貳石入	Ⅳ期	VIA	1613(慶長18)年	84	20図-20
162			96.4	67.2	143.45238	189.0	168.5		Ⅳ期	VIA	1619(元和5)年	84	21図-21
163			83.2	50.5	164.75248	111.8	103.2		Ⅳ期	VIA	1624(寛永元)年	84	22図-22

※集成表の「引用番号」は報告書一覧の番号に対応する。編年は重根 2014 を参考にした。

また、本稿における陶器製大甕の容量は「Simple Digitizer」を用いた座標読み取り²⁾を行い、そこで計測した座標を予め計算式を設定したExcelファイルに読み込むことで容量を算出する。資料の計測位置は頸部水面時の容量（頸部容量）と口縁端部水面時の容量（全体容量）である（図1）。

その他、本稿では陶器製大甕の容量以外に、器高と胴部最大径の計測を行い、そこで得られた器高と胴部最大径の計測成果をもとに相対的深さ³⁾を算出した。

3. 備前焼大甕の器形と容量の分析

(1) 備前焼大甕の容量分布と分類

まず、本稿を執筆するにあたって集成した163点の

備前焼大甕について、大甕の頸部容量に基づいて分類を行う。

集成した備前焼大甕の頸部容量を昇順に並べたものが図2である。ここから、備前焼大甕が100ℓ以下から400ℓ以上という幅広い容量分布を有していることがわかる。また、容量分布を詳しく観察すると、頸部容量が170～195ℓの大甕を確認することができず、この空白範囲から備前焼大甕の容量分布は大きく2つのグループに分類できる。本稿ではこの容量分布から、頸部容量195.0ℓ以下のものを1類、195.1ℓ以上のものを2類として分類する。

(2) 各時期における器形と容量の様相

次に、各時期における備前焼大甕の器形と容量の特徴を整理し、その変遷過程をまとめることとする(図3)。

I期の備前焼大甕は器高75.0cmを境にして1類・2類に区分することができ、その多くが器高80cm代、容量200ℓ代の大甕である。相対的深さは1類が105~130の範囲に、2類が100~120の範囲に大半が分布する。

II期の備前焼大甕は46点のうち26点が1類であり、1類の占める割合が全時期の中で最も高い。1類は器高が60~75cm、容量が100~150ℓ代に分布するものが大半であり、2類は器高が80~95cmで容量が250~300ℓの範囲に分布するものが多く確認できる。相対的深さは1類が105~125、2類が105~115の範囲に多く分布することから、1類が長胴型、2類が

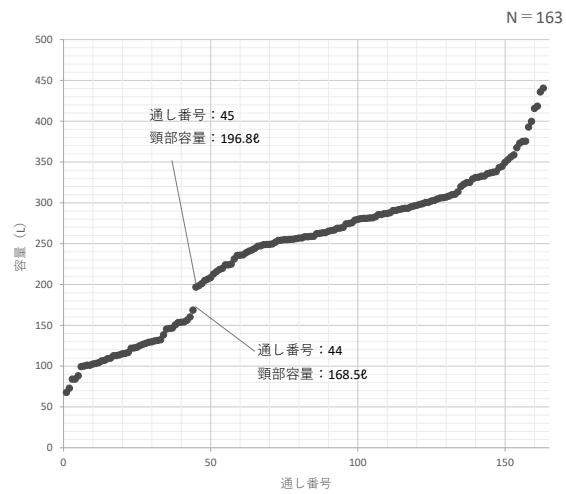


図2 備前焼大甕の頸部容量の分布

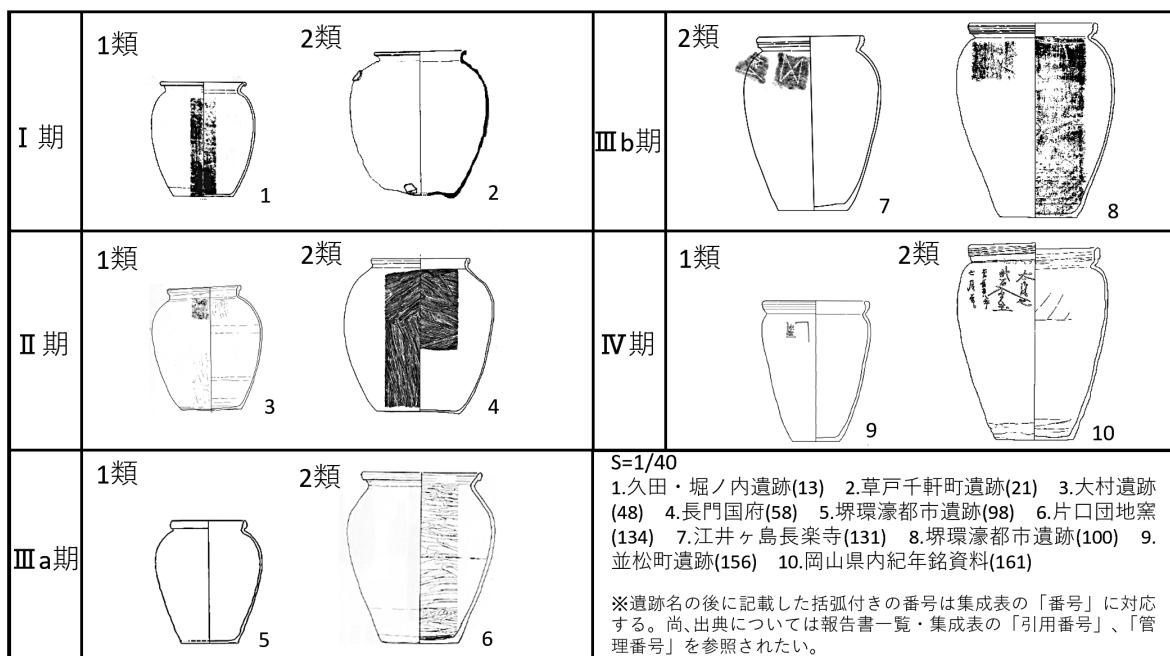
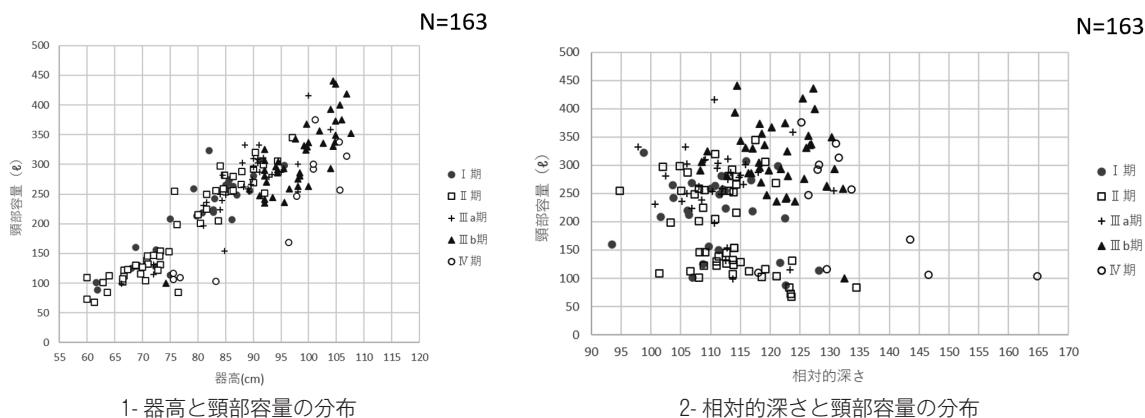


図3 各時期における備前焼大甕の器形と容量の様相と変遷過程

寸胴型であるといえる。

Ⅲ期の備前焼大甕はⅢa期・Ⅲb期とともに器高80 cm以上、容量200 ℥以上の2類に分類されるものがほとんどである。Ⅲa期の2類大甕は、器高80～95 cm、容量220～320 ℥の範囲に分布するものが大半であり、相対的深さが105～120の範囲に分布するものが多く確認できる。Ⅲb期2類大甕は器高がすべて90 cm以上あり、105 cmをこえるものも確認できる。容量は230～380 ℥の範囲に分布し、相対的深さは115～130の範囲に分布するものが多い。Ⅲa期とⅢb期を比較すると、前者は器高・容量が巨大化しつつもⅡ期と似たような器形特徴を有し、後者はⅢa期と比較してさらに器高・容量が大型化すると同時に、長胴化の傾向を強めたといえる。

Ⅳ期の備前焼大甕は資料数が少ないが、12点中5点が1類であり、1類の占める割合が高い。1類は器高が75～80 cm、容量が100～120 ℥の範囲に分布の集中がみられるが、器高が95 cm・容量160 ℥代のものも確認できる。相対的深さは115～165の範囲に点在し、全体的に長胴型である。2類については器高が95 cm以上、容量が250前後～350 ℥の範囲に分布するものが多く、相対的深さは125～135の範囲に多くが分布することから、Ⅲb期2類資料と器高と容量の特徴が共通し、やや長胴化の傾向を強めたといえる。

以上のことから、備前焼の器形と容量は1類と2類で器形と容量が大きく異なることが確認できる。そして、全ての時代に普遍的に確認できる2類については、Ⅰ期からⅣ期にかけて器高の大型化に伴う連続的な頸部容量の増加と長胴化の傾向が確認される。特にⅢb期については、これまでの時代と比較して器形と容量の急激な変化が顕著に現れる。

4. 内容量記載資料の分析

(1) 内容量記載資料の年代と資料的特徴

本節では、内容量が記載された備前焼大甕について、内容量未記載資料と比較し、その資料的特徴を示す。

最初に、内容量記載資料の容量記載形式と年代について述べる。内容量を示す線刻が施された大甕はⅢa期、Ⅲb期、Ⅳ期で確認される。確認された大甕の線刻は「三石入を示すもの」「二石入を示すもの」「二石五斗入を示すもの」の3種類である。

「三石入を示すもの(三石入り大甕⁴⁾)」として分類される資料の表示形式は「三入」と「三石入」の2種類があげられる。「三入」の線刻はⅢa期にのみ確認できる。「三石入」の線刻はⅢa・Ⅲb期の両方で確認

でき、特にⅢb期に多く確認される。

「二石入を示すもの(二石入り大甕)」として分類される資料の表示形式は「二入」と「二石入」の2種類があげられる。「二入」の線刻は1点のみであるがⅢa期に該当するものが確認でき、「二石入」の線刻はⅢa期からⅣ期の広い時代で確認できた。

「二石五斗入を示すもの(二石五斗入り大甕)」についてはわずか2点であるが、Ⅲb期にのみ確認できた。この2点の資料はそれぞれ1582(天正10)年・1583(天正11)年の紀年銘が施されたものであり、資料数と線刻の特徴により、特注品のようなイレギュラーなものとして製作された可能性が高い。

以上のことから、備前焼大甕の容量表示形式の年代観をまとめると、内容量が記載された備前焼大甕はⅢa期、すなわち16世紀前半に出現し、「○入」・「○石入」の2種類の表示形式が認められる。「○入」の表示形式はⅢa期に多くみられ、Ⅲb期には確認できないことから、16世紀前半の年代が与えられる。一方、「○石入」の表示形式はⅢa期からⅣ期まで確認でき、明確な年代を与えることは難しいが、Ⅲb期以降の表示形式が全てこれになることから、「○石入」の表示形式は「○入」と比較して新しいものであると判断できる。さらに、線刻の表示については、三石入り大甕がⅢb期を最後に確認されなくなり、三石入り大甕は16世紀後半に途絶えると考えられる。

次に、内容量記載資料と未記載資料の容量を比較する。図4は各時期における内容量記載資料と未記載資料の頸部容量の分布を比較したものである。内容量記載資料は表示容量に関わらず、すべて195 ℥以上の2類に該当する。同じ2類の内容量未記載資料と頸部容量を比較すると、Ⅲb期の三石入り大甕を除くほとんどの内容量記載資料の頸部容量が内容量未記載資料と同じ範囲に分布することから、内容量記載資料は備前

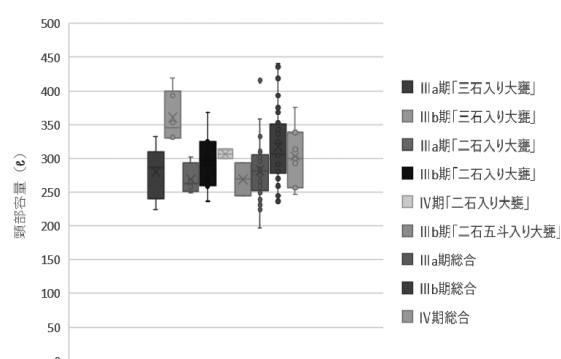


図4 内容量記載資料の分布

焼大甕の中で特別大きな製品でないといえる。また、内容量記載資料は未記載のものと比較して、頸部容量のバラツキが少ないことも確認でき、内容量記載資料が何らかの基準に基づいて製作されたと想像できる。

上記のことから、備前焼大甕の内容量記載資料の資料的特徴をまとめると、内容量記載資料は備前焼大甕全体では最大級の容量を有するものであるといえないと、頸部容量のバラツキが少ないので規格性を有する資料である。そして、内容量の表示形式に時期的特徴があり、容量を示す線刻から大まかな年代が与えられる。

(2) 内容量の分析

本節では、内容量記載資料の容量を分析する。

最初に、内容量記載資料の頸部容量の比較をとおして、各時期の表示形式の示す容量について分析する。

第一に、先に示した図4の箱ひげ図の四分位範囲の分布から、内容量記載資料の表示形式は同時期の大甕に限り原則、三石入りの大甕が二石入りのものより頸部容量が大きく、「三石 > 二石」の大小関係が成立していることが読み取れる。これは、三石入り・二石入りを示す線刻が両方確認できるⅢa・Ⅲb期で見られる関係である。しかし、二石五斗入りの大甕については、同時期であるⅢb期の二石入り大甕の中央値よりも低い位置に四分位範囲が分布することから、表示形式の大小関係が成立しない。これは二石五斗入り大甕の資料数の問題もあるが、同時代の内容量未記載資料と比較しても容量が少ないとから、二石五斗入り大甕が特殊な大きさを有するものである可能性が高い。二石五斗入り大甕の容量の特殊性に関する議論は今後の資料の蓄積に期待したい。

また、表示形式に注目すると、三石入り大甕・二石入り大甕の頸部容量は時代を下るにつれて増加を続けていることがわかる。特にⅢa期からⅢb期にかけての三石入り大甕の変化は顕著であり、中央値が約60ℓも増加している。それと同時に、Ⅲb期については三石入り大甕と二石入り大甕の容量の違いがより明確に表れているといえる。

次に、各時期の内容量記載資料について、表示形式に基づいて頸部容量を割り算し、線刻に示された容量の示す一石を分析する。

図5は各時期における内容記載資料の頸部容量を線刻の示す容量に基づいて算出した一石の分布をまとめたものである。まず、図5から読み取れる各表示形式の容量の様相を紹介する。

三石入り大甕については、Ⅲa期資料が示す一石が

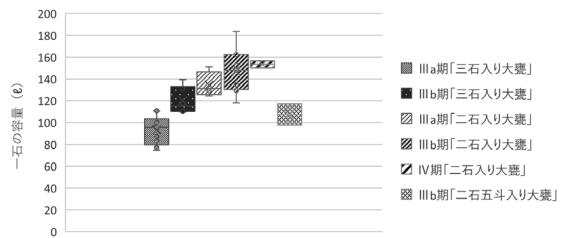


図5 線刻の示す一石の分布

75～120ℓであり、特に90.0ℓ以下、95.1～105.0ℓ付近に分布が集中している。Ⅲb期資料が示す一石は110～140ℓであり、特に105.1～120.0ℓ、130.1～140.0ℓの範囲に分布が集中する。

二石入り大甕については、Ⅲa期資料が示す一石が90～150ℓであり、特に120.1～135.0ℓの範囲に分布が集中する。Ⅲb期資料の一石は、120～185ℓであり、特に125.1～135.0ℓ、161.0～165.0ℓの範囲に分布が集中する。IV期資料については2点のみであるが、それぞれが示す一石は150.2ℓ・156.7ℓである。

二石五斗入り大甕については、Ⅲb期に該当する2点の一石が、それぞれ97.7ℓ・117.3ℓとなっている。

この内容量記載資料の一石を算出した結果、備前焼大甕の線刻に示された一石の値は、現在の一石（約180ℓ）と比較して小さいものが多い。このことから、備前焼大甕の線刻が示す一石は現在の一石と異なるものであるといえる。また、線刻が示す一石の分析から、備前焼大甕の容量に関する特徴が2点あげられる。

1つ目の特徴は、それぞれの線刻が示す一石の値が時代を下るにつれて大きくなることである。これは先に示したとおり、時代を下るにつれて頸部容量が増加することに起因するものである。

2つ目の特徴は、容量表示形式によって一石の値が異なることである。先に示した通り、二石入りの大甕の示す一石は、全時代をとおして三石入り・二石五斗入りよりも大きい。このことから、それぞれの線刻で示された容量が共通の基準を有していないといえる。

以上が、内容量記載資料の容量に関する分析である。容量の分析から16世紀前半から17世紀前半の限られた時代の様相であるが、備前焼大甕の頸部容量や一石の値が変化していることなど、内容量記載資料の特徴を明らかにすることができた。特に、備前焼大甕の線刻が示す一石の値が現代の一石と比べて小さいという特徴は、備前焼大甕の容量が中世の基準に基づくことを端的に示し、容量理解への認識を改める必要を示すものとなるだろう。

5. 備前焼大甕の容量に関する考察と予察

(1) 備前焼大甕の器形と容量の変遷

第3章では、各時期における備前焼大甕の器形と容量の特徴を分析した。ここではその成果のうち、全時期で多く確認することができた2類に該当する備前焼大甕を中心に器形と容量の変遷をまとめた。

2類についてはI～III b期で連続的に頸部容量が増加し、特にIII b期の増加の幅が大きい。それに伴い、2類の器形は器高・相対的深さは高くなる。器高・相対的深さの変化を整理すると、I～III a期はほとんど変化が確認されず、III b期では器高・相対的深さの両方が急激に高くなるという変化が確認できる。また、IV期については、器高・相対的深さがさらに高くなり、頸部容量にバラツキが確認される。このことから、緩やかな容量の変化の中で寸胴型の器形を維持する「I～III a期」と、容量の急激な増加の中で長胴型の器形に変化させた「III b期」、器高・相対的深さがさらに高くなり容量分布にばらつきが生じる「IV期」というように、備前焼大甕の器形・容量の変遷の特徴は3つの時期に分けられる。

一方、1類に該当する備前焼大甕については、各時期の資料数に大きな差がみられるため、本稿ではI・II期の器形の特徴の紹介にとどめる。I・II期のものについては相対系深さが2類のものと比較して大きいことから、やや長胴型の器形を有するといった特徴がある。2類と比較して特にIII a期以降は資料数が著しく少なくなるため、1類の備前焼大甕の分析は今後の資料の蓄積に期待したい。

(2) 内容量記載資料の変遷とその要因

第4章で行った内容量記載資料の分析では、16世紀前半から17世紀前半にかけての内容量を示す線刻が施された備前焼大甕の特徴を示した。それらを基に備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程とその要因を考察する。

まず、内容量記載資料の変遷過程についてであるが、備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程はIII a期とIII b期以降の2つの時代に区分できる。

第一に、内容量記載資料が出現する16世紀前半に該当するのがIII a期である。この時期の内容量を示す線刻の表示形式は「○入」・「○石入」と表記されるもののうち、特に「三入」と表記されるものが多い。当該期の内容量記載資料は16点集成しているが、そのうち12点が「三入・三石入」と表記された線刻を有する三石入り大甕であることから、この時代は「三石

入り大甕の時代」であるといえる。

そして、この内容量記載資料に転換期が訪れるのが16世紀後半、すなわちIII b期である。この時期の内容量を示す線刻の表示形式は「○石入」と表記されるものに限定され、「○入」と表記されるものは確認できなくなる。さらに、二石五斗入り大甕を除く内容量記載資料15点のうち9点が「二石入」と表記された二石入り大甕であり、二石入り大甕が三石入り大甕の数を上回る。これは、三石入り大甕の紀年銘資料が1571(元亀2)年以降に確認できないことからも、III b期中に三石入り大甕が姿を消すことを示しているといえるだろう。このことから、III b期は「二石入り大甕の時代」といえる。そして、17世紀前半に該当するIV期についても二石入り大甕が確認されることから、IV期はIII b期の延長であると捉えられる。

このように、備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程を示した結果、16世紀後半、すなわちIII b期に転換期を迎えるこの時期を境に表示形式など、その様相を大きく変化させていることがわかる。このIII b期という時期は表示形式だけでなく、二石入り・三石入り大甕の頸部容量の差の拡大、内容量記載資料の容量が増加による線刻が示す一石の値の増加といった容量の変化だけでなく、先に示したように器形の変化も確認することができる。

このようなIII b期に確認される変化から、筆者は16世紀後半に備前焼大甕の大規模な品質改良が起こったと考察する。III b期の三石入り大甕・二石入り大甕がIII a期のものと比較して頸部容量の差が大きくなつたこと、一石のバラツキが小さくなったことは備前焼大甕の容量表示の正確さを保証するための変化であったと捉えられる。また、III b期の備前焼大甕の線刻に注目すると、容量の表示形式が「○入」という表記から「○石入」へと変化していることをはじめ、「捻り土」という品質の良い土で製作された製品であることを示す線刻が施された大甕も増加することから、備前焼大甕の作りもIII b期と比較して丁寧になっていることがわかる。以上の点から、III b期に確認される備前焼大甕の内容量記載資料の変化は、16世紀後半の品質改良による表示容量の正確さの保証・胎土といった様々な要素の高品質化をもたらし、それが器形にも影響を与えたと考えられる。そして、この品質改良の背景には、他産地との差別化や桶・樽といった木製貯蔵具の普及による競争(伊藤・上西1977、藤原2000)が主な要因としてあげられる。備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程は、備前焼大甕が他産地の大甕や

桶・樽に対抗し、大甕が衰退する時代に生き残りをかけ、生存戦略を模索した様子を反映しているだろう。

また、備前焼大甕の内容量記載資料の変遷過程で、三石入り大甕の衰退や一石の値の増加を説明したが、それらについては次節で予察する。

(3) 備前焼大甕の容量と枠に関する予察

Ⅲ a 期からⅢ b 期にかけて、内容量記載資料の線刻の示す一石の値が大きくなることから、備前焼大甕が容量の基準とする枠（容量基準枠）が大型化したことが考えられる。これにより、備前焼大甕の頸部容量の増加は容量基準枠の大型化によるものであると説明できる。

この容量基準枠の大型化については、三石入り大甕の衰退の要因として説明できると筆者は考える。容量基準枠の大型化は必然的に頸部容量の大型化をもたらす。さらに、前節で述べた、Ⅲ b 期の品質改良の動きから、二石入り大甕と三石入り大甕の頸部容量の差がより顕著に現れ、Ⅲ b 期の三石入り大甕の容量はこれまでの時代と比較して格段に大きくなる。そして、巨大化した三石入り大甕は、大甕の大きさの限界を迎える、二石入り大甕の容量表示の保証のために姿を消し、結果二石入り大甕のみが継続的に製作されることになったというのが筆者の見解である。この見解については臼井氏も永禄期の三石入り大甕と慶長年間の二石入り大甕の容量が近似する要因を枠制の変革であると捉え（臼井 1984）、「京枠を採用したいわゆる三石甕は二石甕と呼ばなければならぬ（臼井 1984 67 頁）」と指摘している。このようにして、備前焼大甕の容量基準枠の変化が結果的に三石入り大甕の衰退の要因となつたと結論付けることができるだろう。

では、この容量基準枠を変化させた枠は何であっただろうか、最後に内容量記載資料の容量基準枠について予察する。

先述の引用のとおり、臼井氏は備前焼大甕の容量表記が変化する要因を京枠によるものであると結論づけた。しかし、今回容量を分析した大甕のうち、一石の容量が 180 ℥ に達したものはわずか 1 点にすぎず、備前焼大甕の容量基準枠に京枠が採用された可能性は低いといえる。

さらに、三石入り大甕・二石入り大甕は一石の大きさが異なることから容量基準枠の大きさは異なることが推察される。これらを踏まえて本稿では、それぞれの容量基準枠について検討する。

まず、三石入り大甕の一石の容量は、Ⅲ a 期の平均

が 93.41 ℥、Ⅲ b 期のものが平均 120.11 ℥ であり、現代の枠と比較して、それぞれ 0.52 倍・0.66 倍の容量である。この一石の容量を水鳥川和夫氏が算出した中世枠の容量（水鳥川 2010）と比較すると前者は宣旨斗（現代枠の 0.574 倍の大きさ、一石 = 103.32 ℥）と近い値を得ることができるが、容量が 10 ℥ 近く異なるため、完全に合致するとは言い難い。後者については、該当するような枠を発見することができなかった。

次に、二石入り大甕の一石の容量については、Ⅲ a 期の平均が 134.43 ℥、Ⅲ b 期の平均が 146.97 ℥、Ⅳ 期の平均が 153.45 ℥ であり、現在の一石との容量比はⅢ a 期が 0.75 倍、Ⅲ b 期が 0.817 倍、Ⅳ 期が 0.853 倍となる。これらの一石の容量については、Ⅲ a 期・Ⅲ b 期の一石の容量が、水鳥川氏が算出した壺升の容量（現代枠の 0.776 倍の大きさ、一石 = 139.68 ℥）に近い値となる（水鳥川 2011）。Ⅳ 期の一石の容量については、水鳥川氏の算出した壺升の容量のほか、讚岐斗（現代枠の 0.924 倍の大きさ、一石 = 166.32 ℥）の容量に近い値となる（水鳥川 2011）。ここであげた壺升・讚岐斗は、中世後期から近世初頭にかけて西日本で標準的に使用された商業枠である（水鳥川 2011・2012）。

以上が、備前焼大甕の容量基準枠についての予察である。備前焼大甕の容量基準枠の同定はまだまだ議論の余地があるが、Ⅲ a・Ⅲ b 期の二石入り大甕の容量基準枠に壺升が採用されていた可能性があると指摘できるだろう。特に、Ⅲ a 期からⅢ b 期にかけては二石入り大甕の一石が壺升の値を超えるように変化していることから、Ⅲ b 期の品質改良の中で表示容量の正確さの保証が求められ、壺升の値を満たすように容量が変化したと捉えることもできる。また、容量基準枠の特定が困難であったⅢ b 期の三石入り大甕についても、できる限り壺升の容量に近づけようとした可能性があったことも推測できる。これらのことから、備前焼大甕の容量基準枠は西日本の広域で使用された壺升であったと予察でき、16 世紀後半の品質改良の動きは、壺升をもとにした規格の徹底を目的としたものであったと推察できる。備前焼大甕の容量は、中世後期の西日本広域で使用圏を確立した商業枠と関連する可能性があり、西日本の中世社会と連動するものであったといえるだろう。

おわりに

ここまで、備前焼大甕の容量について内容量記載資料を中心に分析し、考察を行った。中世全体の備前焼大甕の器形と容量の変遷については、各時期の分析資

料数の偏りという課題があるものの、器高・相対的深さ・容量の大まかな中世全体の流れを示すことができた。今後、本稿で示した備前焼大甕の変遷過程は、資料の蓄積によってより詳細に示すことができるだろう。さらに、本稿では触れなかったが、使用痕分析など大甕の用途に関する時期的特徴を示すことができれば、大甕の容量の変遷を機能的要因と関連付けて示すことができるようになると期待される。

また、容量の分析については、備前焼大甕の内容量記載資料を中心に、それらの年代観を示し、容量の変遷過程とその要因について考察した。そして、その背景には16世紀後半の品質改良や西日本の広域で使用圏を形成した商業枠が容量基準枠として採用されていた可能性があると予察したが、資料数の問題や枠に関する議論など課題も多い。今後議論を進めていく必要がある。

このように本稿では備前焼大甕の容量に焦点をあてた分析を行ってきた。備前焼大甕の容量は製品の変遷や枠の変化を検討するうえで、有効な情報を内包していると示すことができる。備前焼大甕の容量に関するデータは、その他様々な情報と組み合わせていくことで、中世社会の様相を明らかにする手段の一つとして活用が期待される。

謝辞

本論は2022(令和4)年度、立命館大学文学部に提出した卒業論文を改変したものである。作成にあたり、木立雅朗先生・京都市立芸術大学の畠中英二先生から様々なご指導・助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

注

- 1) これまで内容量を示す備前焼大甕のうち、最も大きな容量を示す線刻は「三石九斗入」が確認されている(桂1989)。
- 2) Simple Digitizerは藤巻晴行氏作成の画像数値化ソフトであり、画像の座標測定などに活用できる。また、ソフトで取得した座標データはCSV形式で保存される(宮内2017)。また本稿で扱う容量計測の方法は宮内2017の方法に従う。ただ、容量を算出するためのExcelファイルについては大甕の容量算出の正確性を確保することを目的に自作したものを使用した。
- 3) 相対的深さは器高／胴部最大径×100で算出される。値が小さいほど資料が寸胴体型になり、値が

大きいほど長胴体型となる(渡辺2010)。

- 4) 本稿で扱う「○石入り大甕」という容量+入り大甕という表記は、線刻によって容量が明らかになっている内容量記載資料を容量別に分類した総称であり、実際にこのような線刻が施されたものは確認されない。大甕の内容量に関する用語としては「一石甕・二石甕・三石甕」が存在するが、これらの用語は大甕を大中小で区分するような、大きさを示す意味合いが強いため、本稿では内容量記載資料の容量分類の表記を全て「○石入り大甕」とする。

参考文献

- 石岡ひとみ 2010 「四国出土の中世備前焼」備前市教育委員会生涯学習課編『備前市歴史民俗資料館紀要11：備前歴史フォーラム資料集 鎌倉・室町 BIZEN』備前市教育委員会生涯学習課 13–28頁
 伊藤晃 2008 「中世備前焼の全国制覇」山陰中世土器検討会編『第七回山陰中世土器検討会資料集』山陰中世土器検討会
 伊藤晃・上西節雄編 1977 『日本陶磁全集(10) 備前』中央公論社
 上西節雄 2001 「備前焼紀年銘資料の諸問題」国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告第89集』国立歴史民俗博物館 653–669頁
 上西節雄 2002 『窯別ガイド日本のやきもの 備前』淡交社
 白井洋輔 1984 「備前焼紀年銘入大甕の時代的特徴」岡山県立博物館編『研究報告5』岡山県立博物館 49–76頁
 桂又三郎 1989 『備前 日本陶磁大系10』平凡社
 堺市教育委員会 1984 『堺市文化財調査報告20：堺環濠都市遺跡発掘調査報告：宿院町東4丁 SKT14地点・調御寺跡 市之町東4丁 SKT19地点 市之町西3丁 SKT20地点 車之町東1丁 SKT21地点』堺市教育委員会
 重根弘和 2003 「中世備前焼に関する考察」近藤喬一先生退官記念事業会編『山口大学考古学論集：近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会 309–320頁
 重根弘和 2014 「中世備前焼の分類と分布」佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学 第四卷』雄山閣 9–28頁
 重根弘和 2022 「備前」日本中世土器研究会編『新版概説中世の土器・陶磁器』新曜社 249–264頁
 高瀬一嘉 2021 「土器容量の算出について—フリーソ

フトを利用した方法と有効性』『兵庫県立考古博物館研究紀要第14号』205–212頁
乗岡実 2001 「備前焼大甕編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究』9 関西近世考古学研究会 104–116頁
乗岡実 2010 「15世紀から17世紀初頭の備前焼を消費した遺跡」備前市教育委員会生涯学習課編『備前市歴史民俗資料館紀要11：備前歴史フォーラム資料集 鎌倉・室町 BIZEN』備前市教育委員会生涯学習課 125–142頁
藤原里香 2000 「壺・甕から結物へ」小泉和子編『桶と樽 脇役の日本史』法政大学出版局 73–97頁
宝月圭吾 1961 『中世量制史の研究』吉川弘文館
間壁忠彦 1990 『備前焼』ニューサイエンス社
水鳥川和男 2010 「中世畿内における使用升の容積と標準升」社会経済史学会編『社会経済史学 75–6』社会経済史学会 585–606頁
水鳥川和男 2011 「中世西日本における使用升の容積と標準升」社会経済史学会編『社会経済史学 76–4』社会経済史学会 525–545頁
水鳥川和夫 2012 「中世東日本における使用升の容積と標準升」社会経済史学会編『社会経済史学 78–1』社会経済史学会 99–118頁
水ノ子岩学術調査団 1978 『海底の古備前』山陽新聞社
宮内信夫 2017 『Simple Digitizerを利用した容量測定方法について』(マニュアル)
渡部裕司 2010 「山形盆地における古墳時代前期土師器甕の計測—容量と形態の特徴について—」山形県埋蔵文化財センター編『年報』山形県埋蔵文化財センター 50–57頁

報告書一覧

各報告書に付与された番号は表2・3に掲載した引用番号と一致する。

1. 宇治市教育委員会 1985 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報8：宇治市街遺跡第2次発掘調査概報』宇治市教育委員会
2. 京都市埋蔵文化財研究所 2005 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005–8：平安京左京六条三坊五町跡』京都市埋蔵文化財研究所
3. 京都市埋蔵文化財研究所 2010 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010–6：平安京左京八条三坊九町跡』京都市埋蔵文化財研究所
4. 京都市埋蔵文化財研究所 2014 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013–16：平安京左京八条

一坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所

5. 大阪市博物館協会大阪文化財研究所 2012 『大坂城跡14』大阪市博物館協会大阪文化財研究所
6. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2004 『兵庫県文化財調査報告270：兵庫津遺跡2(浜崎・七宮地区の調査)』兵庫県教育委員会
7. 神戸市教育委員会 2012 『兵庫津遺跡第53次発掘調査報告書』神戸市教育委員会文化財課
8. 上西節雄 2001 「備前焼紀年銘資料の諸問題」国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館研究報告第89集』国立歴史民俗博物館 pp. 653–669
9. 兵庫県立考古博物館 2010 『兵庫県文化財調査報告380：大野遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会
10. 加西市教育委員会 1999 『加西市埋蔵文化財調査報告37：南上山遺跡』加西市教育委員会
11. 岡山県古代吉備文化財センター 2005 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告192：久田堀ノ内遺跡2』岡山県教育委員会
12. 岡山県教育委員会 1980 『岡山県埋蔵文化財報告10：岡山県埋蔵文化財報告』岡山県教育委員会
13. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1977 『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1976：草戸千軒町遺跡第18～20次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
14. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1979 『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1977：草戸千軒町遺跡第21～23次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
15. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1987 『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報：草戸千軒町遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
16. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1980 『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1978：草戸千軒町遺跡第24～26次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
17. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1981 『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1979：草戸千軒町遺跡第27次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
18. 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1983 『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報1981：草戸千軒町遺跡第30次』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
19. 広島県埋蔵文化財調査センター 1990 『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書84：山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5)5』広

- 島県埋蔵文化財調査センター
20. 香川県埋蔵文化財調査センター1992『東山崎・水田遺跡1』香川県教育委員会
 21. 徳島県埋蔵文化財センター2009『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書74:末石遺跡 中庄東遺跡2』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
 22. 高知県文化財団埋蔵文化財センター2008『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書103:坂本遺跡14』高知県文化財団埋蔵文化財センター
 23. 愛媛県埋蔵文化財調査センター2002『埋蔵文化財発掘調査報告書100:湯築城跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 24. 福岡市教育委員会1992『福岡市埋蔵文化財調査報告書281:博多26』福岡市教育委員会
 25. イビソク関西支店2017『イビソク京都市内遺跡調査報告14:山科本願寺跡・左義長町遺跡』イビソク関西支店
 26. 京都市埋蔵文化財研究所1997『京都市埋蔵文化財研究所調査報告14:京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所
 27. 兵庫県立考古博物館2010『兵庫県文化財調査報告369:南辻遺跡』兵庫県教育委員会
 28. 堺市教育委員会1989『堺市文化財調査報告41:堺環濠都市遺跡発掘調査報告 大町東1丁SKT112地点』堺市教育委員会
 29. 堺市立埋蔵文化財センター2002『堺市文化財調査概要報告98:堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告SKT787地点・熊野町東2丁』堺市教育委員会
 30. 堺市教育委員会生涯学習部文化財課2008『堺市埋蔵文化財調査概要報告117:堺環濠都市遺跡(SKT929)発掘調査概要報告』堺市教育委員会
 31. 和歌山県文化財センター2004『藤倉城跡・川閔遺跡』和歌山県文化財センター
 32. 河内長野市遺跡調査会1997『河内長野市遺跡調査会報16:天野山金剛寺遺跡』河内長野市遺跡調査会
 33. 西安田長野遺跡調査委員会1999『中町文化財報告18-1:円満寺東の谷遺跡』西安田長野遺跡調査委員会他
 34. 兵庫県立考古博物館2012『兵庫県文化財調査報告414:たつの市御津町 室津四丁目遺跡』兵庫県教育委員会
 35. 岡山市教育委員会1998『すくも山遺跡』岡山市教育委員会
 36. 岡山県教育委員会文化課1981『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46:百間川沢田遺跡1;百間川長谷遺跡;百間川岩間遺跡;百間川当麻遺跡12』建設省岡山河川工事事務所
 37. 岡山県古代吉備文化財センター1996『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告113:宮地遺跡 大木遺跡 大木古墳群 粧田山城跡 大村遺跡3』岡山県教育委員会
 38. 岡山県古代吉備文化財センター1988『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71:本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査2』岡山県教育委員会
 39. 尾道市教育委員会1980『尾道1979』尾道市教育委員会
 40. 広島県埋蔵文化財調査センター1999『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書185:廿日市町屋跡』広島県埋蔵文化財調査センター
 41. 広島県埋蔵文化財調査センター1983『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書19:山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(1)』広島県埋蔵文化財調査センター
 42. 間壁忠彦1990『備前焼』ニューサイエンス社
 43. 山口県埋蔵文化財センター1994『山口県埋蔵文化財調査報告164:庵河内遺跡 上の山古墳群』山口県教育委員会
 44. 下関市教育委員会社会教育課1979『長門国府』下関市教育委員会
 45. 高松市教育委員会2000『高松市埋蔵文化財調査報告46:香西南西打遺跡』高松市教育委員会
 46. 徳島県埋蔵文化財センター2009『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書74:末石遺跡 中庄東遺跡2』徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター
 47. 高知県教育委員会1986『田村遺跡群 第9分冊:本文9』高知県教育委員会
 48. 高知県文化財団埋蔵文化財センター2014『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書140:弘人屋敷跡』高知県文化財団埋蔵文化財センター
 49. 愛媛県埋蔵文化財調査センター1985『道後今市遺跡昭和60年度本文編』愛媛県教育委員会
 50. 中世墓資料集成研究会編2005『中世墓資料集成四国編』中世墓資料集成研究会
 51. 水ノ子岩学術調査団1978『海底の古備前』山陽新聞社
 52. 福岡市教育委員会2020『福岡市埋蔵文化財調査報告書1396:博多167』福岡市教育委員会
 53. 京都市埋蔵文化財研究所1999『京都市埋蔵文化財調査概要 平成9年度』京都市埋蔵文化財研究所

54. 京都府埋蔵文化財調査研究センター1995『京都府遺跡調査概報63：平安京跡左京一条二坊十四町（左獄・囚獄司）発掘調査概要』京都府埋蔵文化財調査研究センター
55. 四門西日本・中部支社京都支店2019『平安京左京四条四坊三町跡』四門西日本・中部支社京都支店
56. 文化財サービス2021『文化財サービス発掘調査報告書 第20集：平安京左京四条四卯一町跡・烏丸御池遺跡発掘調査報告書』文化財サービス
57. 神戸市教育委員会2001『兵庫県指定有形民俗文化財沢の鶴大石蔵発掘調査報告書』神戸市教育委員会
58. 神戸市教育委員会2004『御影郷波がえし蔵』神戸市教育委員会文化財課
59. 八尾市文化財調査研究会2005『財団法人八尾市文化財調査研究会報告80：八尾市文化財調査研究会報告80』財団法人八尾市文化財調査研究会
60. 大阪府文化財調査研究センター2002『財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書71：津田城遺跡』大阪府文化財調査研究センター
61. 大阪市教育委員会1984『昭和57年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会他
62. 大阪市教育委員会他2019『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2017）第1分冊』大阪市教育委員会
63. 神戸市教育委員会2010『兵庫津遺跡発掘調査報告書1』神戸市教育委員会文化財課
64. 堺市教育委員会1982『堺市文化財調査報告10：東上野芝遺跡発掘調査報告 堺環濠都市遺跡発掘調査報告 新金岡更池遺跡発掘調査報告—第4次調査 鈴の宮遺跡発掘調査報告—第5地区』堺市教育委員会
65. 堺市教育委員会1984『堺市文化財調査報告20：堺環濠都市遺跡発掘調査報告：宿院町東4丁 SKT14地点・調御寺跡 市之町東4丁 SKT19地点 市之町西3丁 SKT20地点 車之町東1丁 SKT21地点』堺市教育委員会
66. 堺市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センター1987『堺市文化財調査報告35：堺市文化財調査報告35』堺市教育委員会
67. 堺市立埋蔵文化財センター1997『堺市文化財調査概要報告61：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT78地点・錢鑄型出土地点の調査 堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 SKT380地点・熊野町
- 西1丁 石原町2丁遺跡発掘調査概要報告 IH2-1地点』堺市教育委員会
68. 堺市博物館編2012『堺出土の茶陶 備前焼』堺市博物館
69. 堺市教育委員会1990『堺市文化財調査概要報告4：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 市之町東4丁 SKT212地点 堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 南旅籠町東1丁 SKT240地点 浜寺石津町東遺跡発掘調査概要報告』堺市教育委員会
70. 堺市立埋蔵文化財センター2005『堺市埋蔵文化財調査概要報告109：堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告』堺市教育委員会
71. 大阪府文化財センター2008『大阪府文化財センター調査報告書177：堺環濠都市遺跡 I (SKT959地点)』大阪府文化財センター
72. 堺市市長公室文化部文化財課2010『堺市埋蔵文化財調査概要報告130：堺環濠都市遺跡 (SKT989) 発掘調査概要報告 堺区熊野町西1丁所在』堺市教育委員会
73. 和歌山県教育委員会1979『根来寺坊院跡発掘調査概報2』和歌山県教育委員会
74. 和歌山県教育委員会1986『根来寺坊院跡』和歌山県教育委員会
75. 財団法人和歌山県文化センター1989『根来寺坊院跡』和歌山県文化財センター
76. 和歌山県文化センター1994『根来寺坊院跡』和歌山県文化財センター
77. 岩出町教育委員会2002『岩出町内遺跡発掘調査概報』岩出町教育委員会
78. 和歌山県文化財センター1991『鳥居遺跡発掘調査概報』和歌山県文化財センター
79. 姫路市教育委員会1975『姫路市文化財調査報告5：加茂遺跡』姫路市教育委員会
80. 姫路市教育委員会1984『本町遺跡』姫路市教育委員会
81. 姫路市埋蔵文化財センター2020『姫路市埋蔵文化財センター調査報告93：姫路城城下町跡』姫路市教育委員会
82. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編1991『兵庫県文化財調査報告／兵庫県教育委員会編，第94冊94：福田片岡遺跡』兵庫県教育委員会
83. 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所1992『兵庫県文化財調査報告113：叶堂城跡』兵庫県教育委員会
84. 備前焼紀年銘土型調査委員会編1998『備前焼紀

- 年銘土型調査報告書』備前市教育委員会
85. 吉井町教育委員会 1990 『備前周匝茶臼山城址発
掘調査報告書』吉井町教育委員会
86. 広島県教育委員会事務局教育部文化課中世城館遺
跡調査班 1994 『中世城館遺跡保存整備事業発掘
調査報告 2 : 万徳院跡第 2 次』広島県教育委員会
87. 徳島県埋蔵文化財センター 1995 『徳島県埋蔵文化
財センター調査報告書 9 : 四国縦貫自動車道建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 9』徳島県教育委
員会・徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団
88. 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1982
『北九州市埋蔵文化財調査報告書 12 : 茶屋原西
遺跡別冊』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財
調査室
89. 大阪府文化財センター 2012 『大阪府文化財セン
ター調査報告書 231 : 並松町遺跡』大阪府文化財
センター

